

## 大学図書館における未貸出図書の分析

西野 祐子

図書館を取り巻く環境は厳しさを増している。図書館サービスの実態を把握し、限られた資源を効率よく利用することで図書館サービスの維持・向上を目指すこと、定量的なデータをもとに、組織運営および意思決定の正当性を示すことが図書館に求められている。これまで、利用調査や蔵書評価等の形で数多くの研究がなされ、特に図書館サービスの根本となっている蔵書の利用についての調査がなされてきた。一方で一度も貸出がされなかった図書すなわち未貸出図書に関してはこれまでほとんど言及されてこなかった。本研究では、大学図書館の蔵書のうち未貸出図書を分析することで、未貸出図書の割合が高くなる原因を考察する。

分析対象は、国立 A 大学の、2011 年時点の蔵書データに記録されている蔵書のうち、2006 年度に受入された貸出可能な中央図書館所蔵の蔵書 10,401 件とした。2006 年 4 月から 2012 年 3 月までの、上記対象の図書の貸出のうち、図書館の業務用の貸出を除いた貸出データ 1,531,853 件を用いて貸出回数を算出し、貸出回数がゼロとなった図書すなわち未貸出図書と、貸出があった図書とに区分した。そして出版年、複本の有無、本文に使用されている言語、NDC による主題区分、大きさおよびページ数と未貸出図書との関係を分析した。

分析の結果、未貸出図書の件数は貸出可能な図書件数の 34%にあたる 3,860 件となった。この未貸出図書の割合は先行研究よりも低い数値であった。本文言語が外国語の図書は未貸出図書となりやすく、その 58%は未貸出図書となっていた。また判型の大きな図書も未貸出図書となりやすく、A4 判の図書は半数以上が未貸出図書となっていることがわかった。一方でページ数の多寡では統計的には有意差がみられなかった。同じ受入年でも出版年が古い図書は未貸出図書となりやすく、複本がある図書は未貸出図書となりにくいことも明らかになった。以上の結果から、言語や大きさが未貸出図書を生む主な要因であることが明らかになった。

先行研究よりも未貸出図書の割合が低い数値となった要因として、先行研究では未貸出図書の割合を算出する際に、母数となる蔵書数に禁帯出図書が含まれていることが考えられる。つまり、未貸出図書の割合はこれまで誇張されてきていたと考えられる。それでも存在する未貸出図書の発生要因として本研究では言語と大きさを挙げたが、学習用図書と研究用図書の違いや、寄贈図書と購入された図書の違い、図書館の予算で購入した図書と大学や教員の予算で購入した図書の違いといった要因も考えられる。今後このような観点からも分析を進め、未貸出図書が発生する要因を解明することで、蔵書構築のありかたを考えていきたい。

(指導教員 逸村裕)